

天才アートKYOTO



天才アートとは、障碍のある人の多くがもつ優れた感性と表現力、そこから湧き出る独創的なアート作品に対して、特定非営利活動法人 障碍者芸術推進研究機構がネーミングしたものです。欧米ではアール・ブリュット、あるいはアウトサイダー・アートなどと呼ばれています。当機構は天才アートを推進し、その啓発活動を行っています。



発行日 2017年10月10日 (火)

発行者 特定非営利活動法人
障碍者芸術推進研究機構

天才アート KYOTO

発行所 〒605-0811
京都市東山区大和大路四条下る
4丁目小松町 四条・新道アトリエ
info@tensai-art.kyoto
http://tensai-art.kyoto

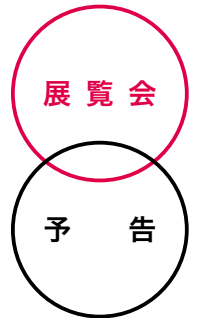
編集 株式会社 三六六

天才アート

検索



『クレパスのグラデーション・カラーージュ』川嶋 誉大 Yoshihiro KAWASHIMA 色画用紙・クレパス・色紙 390x540mm 2016年



第6回 天才アート展2017 近日開催!!



2012年から毎年開催している「天才アート展」。第6回目となる2017年度は、9月開催の第4回企画展を前期展、10月の本展を後期展と位置づけ、2回にわたって2会場での実施となります。9月21日(木)から10月1日(日)まで開催した前期展「endless, breath」の終わりのない表出、一瞬一瞬の息づかい」は、会場となった京都市男女共同参画センター・ウイングス京都「ギャラリースペースオープニング企画」ということもあり、大変好評をいただき終えることができました。

そして後期展は、10月27日(金)から11月8日(水)まで「堀川御池ギャラリー」にて開催致します。なお、後期展では「障害者芸術の振興にかかわる諸問題」をテーマに、松坂浩史氏(文化庁地域文化創生本部事務局長)、建畠哲氏(多摩美術大学学長・京都文化芸術センター館長)、服部正氏(甲南大学文学部准教授)を講師にお招きし、シンポジウムを併催致します。

文化庁移転に向けて地域文化創生本部が京都市東山区に開設されました。障害者の芸術振興が重点施策のひとつとされている中、2020年東京オリンピック・パ

天才アートとは
障壁のある人の手による独自の創作をいいます。

第6回 天才アート展 2017

10.27(金) - 11.8(水)
11:00 - 18:00
堀川御池ギャラリー

シンポジウム
10.28(土)
14:00 - 16:30



堀川御池ギャラリーの外観

ラリンピックの開催に向けて障害者の芸術・文化振興を目的とした活動なども増えてきました。こうした社会からの注目を受けるために直面する問題について議論を深めていきます。

また同展は、「東アジア文化都市2017 京都」の連携事業で、京都の伝統工芸や産業・企業とコラボした商品も展示致します。

【天才アート展2017】入場無料
10月27日(金)～11月8日(水)
11時～18時(最終日は17時まで) / 月曜日休館
堀川御池ギャラリー・京都市中京区油小路通御池上る押油小路町238-1

「シンポジウム」入場無料
「障害者芸術の振興にかかわる諸問題」
* 障碍のある人の独自のなココロの芸術をどう呼ぶべきか
* 作品のマーケットをどう創出すればいいかなど

10月28日(土) 14時～16時30分
会場：京都市立京都堀川音楽高等学校
「城巽アリーナ」(堀川御池ギャラリー北隣)

〈講師〉
松坂浩史(文化庁地域文化創生本部事務局長)
建畠哲(多摩美術大学学長・京都芸術センター館長)
服部正(甲南大学文学部准教授)

2018年1月
「天才アート新春展」予告

2018年1月、「天才アート新春展」と銘打って「堀川御池ギャラリー」と「東山区総合庁舎展示ホール」の2会場で開催致します。本展では「新春」にちなんで、「干支・動物・正月・春」をテーマとする作品を展示します。

新道アトリエには、「動物」「季節」などをテーマに描き続けるアーティストがいます。その作風は、「自らのイメージ世界・物語」をひたすら画面に織りなしていくスタイルと、図鑑や写真など見ながら対象を画面に再構成していくスタイルに大別されます。前者が、きわめて個性的な作品に仕上がっていくのは当然ですが、後者も、各作家のエネルギーな「表現衝動」や、対象物を独特に誇張化して表現しようとするなど、これらもきわめて個性的な「表現欲求」的な制作スタイルの作品となつていきます。

いずれも、見るものを飽きさせない、忘れられない作品群で、10名の作家の作品100点の出品を予定しています。ぜひご来場ください。

「堀川御池ギャラリー」会場
2018年1月11日(木)～1月21日(日)
11時～18時(最終日は17時まで) / 月曜日休館
「東山区総合庁舎展示ホール」会場
同1月13日(土)～1月19日(金) 9時～17時 / 土日は11時～17時 / 休館日なし

好評を博した第4回企画展 “endless, breath.” Report

展覧会

報告

第4回企画展は、中京区にある京都市男女共同参画センター「ウイングス京都」ギャラリースペースのオープニング企画も兼ねて、9月21日（木）～10月1日（日）の会期で開催しました。

同ギャラリーの240㎡ワンフロア無柱空間の特長を生かし、「endless, breath.」～終わりのない表出、一瞬一瞬の息づかい」をテーマとするメインゾーン、10月27日（金）から開催予定の天才アート展2017プロログゾーン、オリジナル商品販売ゾーンの3つのゾーンに分けて展示しました。

メインテーマ展示ゾーンでは、障碍のある作家の中でも自閉症とされる人の、「他者から影響されない独特の制作スタイルと きわめて持続的な表出エネルギー」をキーワードに、天才アートKYOTO



○新道アトリエの作家の中から5名、それぞれの特長な作品を端的に俯瞰できるように工夫し、プロログゾーンは、天才アート展2017に出展する作家の中から抜粋した絵画作品を展示しました。

また、会場には天才アートKYOTOの協力、大谷大学文学部文学部倉光延行准教授のプロデュースによる「大谷大学 PENZ FACTORY Media Works」が企画制作し、9月16日（土）に開催された「岡崎ときあかり annex 2017 ～あかりとアートのプロムナード～」で「ルームシアター京都賞」を受賞したプロジェクト「ノンマッピング作品をアレンジした映像作品も上映しました。

なお同展は、「東アジア文化都市2017京都」の連携事業で、オリジナル商品販売

ゾーンでは、京都の伝統工芸や産業、企業とコラボレーションした商品をはじめ、企画展開連商品も販売し、多くの方にお買い求めいただきました。

会期中はたくさんの方の来場者にお越しいただき、朝日新聞・京都新聞・リビング京都の各誌で取り上げられました。来場者からは、「作品の特長や制作スタイルがよく分かった」「映像で見ると雰囲気違って面白かった」などの声が多く寄せられました。

高瀬川・四季Air 「ココロイロイロ」展

昨年引き続き、7月1日（土）～9日（日）の期間で、前川オーナーの招待により京町家の高瀬川・四季Airにて、複製画 collection 2017「ココロイロイロ」展を開催しました。高瀬川に面した涼風のそよぐ京町家のギャラリーで、複製画を中心とした作品の展示と新作のミュージアムグッズ等の販売を行い、たいへん好評でした。これからもご期待ください。



東山区人権啓発展

8月1日（火）～18日（金）に「東山区人権啓発展」に協賛して、作品17点を東山

区総合庁舎1階の展示ホールに出展しました。本年度3年連続の出展となり、新道アトリエの地元である東山区民の皆さんや市民など広く知られるようになっていきます。

天才アート展 in 京都マルイ

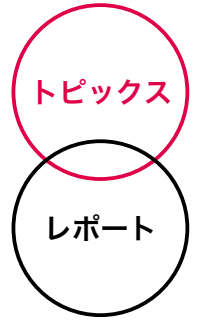
8月4日（金）から9月13日（水）まで、京都マルイにて天才アートKYOTOの作品・複製画・オリジナル商品の展示をしました。このうち4日間はオリジナル商品の



販売も致しました。当初の予定では8月30日（水）までの開催でしたが、ご好評をいただいたことで9月まで延長となったものです。

初めての商業施設での展示でしたが、思いの外、作品が店内の雰囲気マッチしており、お買い物にいられたお客様に楽しんでいただけたのではないかと思います。展示フロアでは、会報やパンフレットを手に熱心に作品を見て回られる方もお見受けし、観光客や市・府民の皆さまに天才アートKYOTOを知っていただく良い機会となりました。





甲南大学で富田理事が「発達障がいとアート」をテーマに公開講座



甲南大学人間科学研究所では、地域の子どもたち、とりわけ発達に問題がある子どもが気軽に参加できるような美術教室の開設を目指して研究と教育の活動を進めています。その一環として、研究教育プロジェクト「アートと発達支援―学校から地域社会へ」の連続公開講座が開講されています。

その第4回目として、2017年7月15日(土)、「発達障がいとアート」をテーマにシンポジウムが開催されました。講座は、望月直人氏(大阪大学キャンパスライフ健康支援センター准教授)の「発達障がいの基礎」と、富田千果子氏(当機構理事)「自閉症のわが子・見生から生まれたロゴアート」の二つの講演と、大西綾子氏(甲南大学文学部准教授)、服部正氏(甲南大学准教授)の講師2人と学生や参加者との意見交流、質疑応答などの内容でした。受講された百数名からのレポートに、「今まで思っていた発達

障害へのイメージとは違って、理解が深まった」、「障害があるないに関わらず、強みを生かせることに会おうことが大切だと思った」、「障害がある方の才能があふれるアートの力が素晴らしいと思った」などの意見や感想が寄せられました。

障害者アートミュージアム KYOTO 設立支援基金

天才アートKYOTOでは、文化都市・京都にふさわしい障害者の芸術作品を常設展示するミュージアムを設立し、広く社会に向けた情報発信の中核的施設とする計画を進めています。そのため、この計画に賛同していただき支援する「障害者アートミュージアムKYOTO設立支援基金」を募集しています。この基金は一般の運営費とは別に口座を設け、ミュージアム設立費用として積立てて参ります。

1口3万円の寄付をしていただくと、お礼として天才アートKYOTOの作品の複製画(額装済)をプレゼントします。

この複製画のコストの一部は、「著作権料」として障害のある作家に還元され、残金は設立支援基金に充てられます。趣旨にご賛同の上、ご協力いただきますようお願い申し上げます。

なお複製画は、高精密なジークレー印刷により、原画とほとんど変わらない忠実さで再現されています。額縁はナチュラル塗装の木製で、サイズは太子サイズ(397×

306ミリ)です。

昨年の募集開始以降、10件の応募があり、複製画は好評をいただいています。詳細やお申し込みは、ホームページをご覧ください。
<http://tensai-art.kyoto/support/kitin/>

京都洛中ローターアクトクラブ様によるミュージアム設立募金活動

奉仕を通じて社会への貢献活動を展開されている京都洛中ローターアクトクラブ様では、天才アートKYOTOの取り組みに賛同をいただき、募金活動を始められました。

同クラブのさまざまな活動の中で、募金箱を設置されて募金を呼び掛けていただいています。この9月には、東山区のギャラリ「集西楽サカタニ」で開催された、真壁悠会長のご個展「ひびのかけら」の会場で募金箱を設置していただきました。

これからも機会があるごとに募金を続けていただけるとのことで、天才アートKYOTOとしても心強く、紙面を通じて感謝申し上げますとともに、ご紹介をさせていただきます。



写真は、個展会場で募金箱を持たれる真壁会長(右)と京都市教育委員会総合育成支援教育担当部長の大黒喜裕様。

大谷大学とのコラボによるプロジェクト「エクシオンマッピング」

9月16日(土)、岡崎地域の夜の魅力をアピールする「岡崎ときあかり annex 2017」の事業として、プロジェクト「エクシオンマッピング」の上映があり、大谷大学人文情報学科・倉光延行准教授のプロデュースで、大谷大学PENKI FACTORY Media Works と天才アートKYOTOのコラボレーションによる作品「Endless, Breath」が上映されました。

プロジェクト「エクシオンマッピング」の映像は、障害者の創作に多く見られる繰り返しの映像、反復性といった特性から生み出された作品が次々に映し出されます。ゼロハンターと厚紙を使ったロゴアート作品、名前を書き続ける作品、ペンを使って弧を重複させて描く作品、ハサミを使って高度な技術で素早く切り抜かれる作品など、作品紹介だけでなく岡崎モダンのテーマに沿った表現も見ることができました。京都市美術館別館のレトロな建物に軽快に彩りよく映し出される作品は、展覧会で鑑賞するものとはまた違った魅力に溢れていました。

なお、岡崎ときあかりアワードの対象上映は全20作品で、同作品は「ロームシアター京都賞」を受賞されました。



清水 元介 Motosuke SHIMIZU 1991年生
小学生の時から身の回りの親しい「人」を好んで描いていた清水元介は、総合支援学校高等部のころから、テレビのパラエティー番組やミュージック番組に出てくるアイドル等を描くようになった。画面は番組のストーリーを彼独自にアレンジして興味深いものになっている。

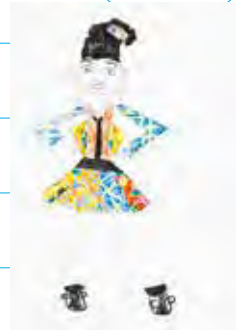
清水 元介



「AKB 48 恋するフォーチュンクッキー」色画用紙・ペン・えんぴつ・クレパス 2017年



「AKB 48 清水元介」画用紙・ペン・えんぴつ・クレパス 2016年



「HKT 48 指原莉乃」画用紙・ペン・えんぴつ・色えんぴつ 2016年



「AKB 48 大島優子」画用紙・ペン・えんぴつ・色えんぴつ 2016年

本 ちはる



「ちはるの絵日記」画用紙・マジックペン 2016年



「ちはるの絵日記〜エンディング〜」画用紙・マジックペン 2017年

本 ちはる Chiharu MOTO 2003年生
本ちはるの作品は、1、2センチ四方の中に日常生活のワンカットを絵日記のように描き、それがまるでチェーンかタイルのように綴られていく。このスタイルで描き始めた小学生のころは、学校生活の題材が多かったが、最近はテレビのドラマなどを再構成するようになってきている。

佐野 靖文



「無題」色画用紙・サインペン 2014年

佐野 靖文 Yasufumi SANO 1970年生
水性マーカーや油性マーカーを好んで使う佐野靖文は、画面に丸や四角にチェックの文様で何かリズムをとるように描き続け、仕上がるとその濃淡や色彩の変化に躍動感があって面白い。この表現スタイルをとり始めた時期は定かではないが、アトリエでは既に5年になる。



「無題」色画用紙・アクリル 2015年



「無題」色画用紙・マジックペン 2014年

日常生活の中で育まれていった彰男の絵画

土屋敏子

●彰男の誕生から1歳まで

ピーポーピーポーピーポー!! 昭和46年12月1日、午前中に産婦人科の診察を受け、「ゆつくり夕方に入院の準備をして再来院してください」と院長先生に言われ、いよいよその時が来たと思いつきながら、付き添ってくれた私の母と共にそのころ住んでいた池田市の五月山にあったアパートに、よつこらよつこらと重いお腹をかかえて帰りました。ところが帰宅後しばらくして、お手洗いで破水の兆候が! あわわー、慌てふためいた母は、タクシーを呼ぶ電話をかけたためアパートの近くのタバコ屋さんへ。アパートには電話はありませんでしたし、携帯電話もない時代でした。タバコ屋のおばさんは、慌てた母の様子を見て気を利かせ、すぐに119番に電話。おかげで私は救急車でピーポーピーポーと産婦人科へ再来院する羽目になったのでした。産婦人科の先生に「おばあさんがついているから大丈夫と思っていたのに!」と、お小言を頂いたのはもちろんです。やれやれ、こんな具合で彼は生まれる前からハプニング起こしの王様でした。

喜びと同時に、「この子は普通と違う。何かある」という不安感が私を襲いました。普通、赤ちゃんの頭には大泉門と小泉門とあり、大泉門の方はしばらく閉じませんが、前頭部の方にある小泉門の方は生まれると直ぐに閉じるのだそうです。しかし、彼の小泉門は大きく開いたままでした。そうした場合は脳水腫が疑われました。心臓も雑音がありました。後に精密検査の結果、彼はダウン症であることが分かりました。新生児の時から息が荒く、軀は大人顔負けでした。ミルクを飲む力が弱かったためか、たった50ccを飲むのに1時間以上かかりました。風邪をひけばすぐに肺炎が心配されましたし、口の中には驚口瘡^{がとそら}というカビも生えました。

でもでも、やつぱり人間の生命力はすごいものです。1歳の誕生日を迎えた時、手作りのケーキに立てた1本のローソクの炎の向こうには、やつとつかまり立ちができるようになった彼のニコニコ微笑む笑顔がありました。「お母さん、こつち向いて。僕、ここにいますよ」と、まるで話しかけているようでした。その時、それまで一つの命をただただ育てることに無我夢中だった私と彼が初めて本当に向き合えた瞬間でした。

●2歳半から幼稚園へ、落書きから顔の絵へ

その後、だんだん体力をつけていった彼は、2歳半を迎えるころには右足の股関節

の変形はあるものの、脳水腫の心配はなくなり、心臓の穴も成長とともに閉じたのか雑音はなくなっていました。そしていつの間にか部屋の壁に貼った絵ボードに落書きいっぱい、音楽をかければ、縄跳びの手をマイク代りによちよち歩きの足で歌ったり、踊ったりと、とても明るい子どもに成長していました。今から40数年前は、まだ障がいをもつ子どもの保育所や幼稚園での受け入れは難しい時代でした。そのころは、大阪の池田市から高槻市に移り住んでいましたが、同じマンションの子どもさんが行っている私立の幼稚園で障がいをもっている子どもを受け入れてくれるという情報を聞いて、どうしても3歳から集団の中の保育が必要と考えていた私は、園長先生に会いに出かけました。

その結果、「入れてあげられるかどうか分からないけど、とにかく昼休みに園児が園庭に出て遊ぶので、その時間に遊びに来られたらどうですか」と、とてもうれしいお返事をいただき、彼は入園時期半年前から毎日幼稚園に通い始めました。そして翌年4月うれしい入園式を迎えるのです。今から思えば、半年間園長先生は、彼を受け入れることができるかどうか、障がいの程度はどうか、それに対する親の対応の仕方はどうかなど、ずっと見ておられたのではないかと思います。ともかくにも、彼も親である私も、3年保育で幼稚園に入園し、園長先生をはじめ他の先生方、同年のお母様方や園児の皆さんに育まれ、いろいろなハプニングを共に乗り越え成長することができました。

その幼稚園では「ひなぎく祭」という祭



が年1回ありました。親も子も絵出でお菓子作りをしたり、工作をしたり、人形劇などは道具作りから上演まで1年がかりで仕上げたり、図書室では絵本の読み聞かせをしたり、大変でしたが懐かしい思い出です。彼はお菓子作りからも、人形劇からも、絵本からも、いろいろなものを吸収していきましました。5歳の時、落書きから初めて形になったのが「顔の絵」です。おにぎりのような形の中に目と鼻と口を描き、周りに毛をいっぱい描いています。

●小学校から中学校のころ、塗りつぶしから具象へ

小学校では普通学級に在籍し、担任のほかに副担任をつけていただきました。音楽、体育、図工等、一緒に学習できる授業はクラスのみならず、一緒に、難しい課題は副担任と共に彼に合った内容の学習をし、必ずその授業の終わりに、彼が何を勉強していたのか、皆に紹介してもらったりして、クラスの中ではアイドル的な存在でした。小学校一年生の時から妹と共に大好きなお絵描き教室とピアノ教室に通い始めました。お絵描き教室の先生が、「彰男君はいろいろな色を塗り重ねて塗りつぶすから最後は真っ黒になってしまつて、家に持ち帰ってもらう作品がない」と、よく言っておられました。が、それは彼がその後いろいろな



色を使って、彼らしい絵を描き上げていくための過程でした。9歳の時、教室のみんなと写生に出かけ描いたのが「山門」の絵です。

そんな風に「地域の中で極々当たり前」をモットーに過ごしてきましたが、人前でも言葉がなかなか出ませんでした。ピアノもせっかく上手に弾けても、弾きたい気持ちにはみんなに伝わってきませんでした。なぜか弾き始めるのに時間がかかり、彼のために用意してくださった音楽の時間をどれだけ潰したのか。しかしやはり仲間の中の成長はすごいと改めて思います。小学校の卒業式の折、各卒業生が宣言するのですが、「僕は中学生になります。中学に行っても頑張ります。ありがとうございました」と初めて言えた時、ああ、こんなにも成長していたんだと、親として本当に感動しました。

●中学校卒業後、絵のスタイルの確立へ

中学校卒業後は、養護学校に行かず、家の近くに140坪程の畑を借りて畑仕事をしながら、陶芸教室、手織教室、ピアノ教室、お絵描き教室に通うことを選びました。特にお絵描き教室には、畑で収穫した大きな大根や白菜などをよく持ち込み、キャンパスに描きました。家では、墨で和紙に珍し

いアロエの花を描いたり、畑で大きく育ったひまわりを襖に描いたりしました。16歳から23歳のころ、思えばこのころ若くもあり、絵に対してひた向きで、彼の絵が彼らしい絵へと成長していった時期とと思います。中学卒業後、同級生との再会を喜び合う場として、年一回個展「日々の暮らしから」を開きました。もちろん、個展には絵だけではなく、1年間に作りためた陶芸作品や手織りのマット、ロープで結び織りした立体作品なども並べました。



●父親世界、10年以上の空白から立ち直りへ

ところが、個展6回目を数えた冬、父親が突然病気で倒れ、京都の専門医のいる病院へ入院することになり、20年程過ごし慣れ親しんだ高槻から京都への引越を余儀なくされました。そして1年後、家族の願いも空しく、父親は帰らぬ人となってしまいました。生活は一変しました。家族にとっても彼にとっても試練の時だったように思います。そんな時、家の近くの作業所に入っていたことはとても救いになりました。それでも徐々に徐々に彼が以前のようになんか淡々とした「絵と音楽の自分の世界の日常」を取り戻すのに10年以上かかりました。そして、作業所に通いながら、お友達に勧められたオカリナの練習を始め、2008年からは第一と第三土曜日には枚方の塔本アトリエに通うようになりまし

た。塔本アトリエとは高槻のお絵描き教室の時代からつながりがあります。

●太陽がある自分の世界

最近の彼の絵を見ていると、以前にも増して明るく、大胆になってきたように思います。そして、キャンパスの左上角には必ず「太陽の顔」がのぞいています。このような絵を描くようになったのはいつころからか、少しアルバムを遡ってみますと、2014年8月に描いた「太陽の塔」の絵がありました。

「彰男さんも一回大きめのキャンパスに挑戦してみるか」という塔本先生のアドバイスで、50号のキャンパスに一気に迷いなく描いたのがこの絵でした。なぜ「太陽の塔」の絵だったのか。この少し前、吹田市の万博記念公園で、特別展「みる、ふれる、あそぶ太陽の塔」(2014年3月29日〜8月3日)が開催され、初代「黄金の顔」が展示されているのを家族で見に行ったのを思い出しました。じかに見たその大きさと美しさは想像以上で、圧倒されたのを覚えています。この時の強い印象が彼を一気にキャンパスに向かわせた原動力だったのかなと思います。

そしてその原動力は、もうひとつ10代の頃に遡ります。その頃の絵にも時々「太陽の顔」が左上角にチョココンとのぞいているからです。彼は子供の頃からなぜか空を見上げるのがとても好きで、昼間は輝く太陽の話、暗くなつてからは夜空を見ながら月や星の話をよくしたものです。その頃の思いが万博記念公園の「黄金の顔」を見たことにより走馬灯のように浮かび上がり、

長かった彼のブランクを埋めたのかもしれない。今や彼にとって太陽は、再び自分の世界の中で、なくてはならない存在になったようです。

今彼は、一昨年天才アートKYOTOとの出会いの機会に、父親の他界後20年余りお世話になった作業所を退所し、彼のペースで再び好きな音楽を奏でたり、CDをバックミュージックに無心にキャンパスに向かったりしています。そんな後ろ姿を見ていると、「ああ一つ試練を乗り越え、大きくなって自分の世界を彼なりに歩んでいるんだなあ」とつくづく思います。ダウン症の場合、他の人より早く体力の衰えがやってきます。もうすぐ46歳になる現在、老人性の病気も増えてきました。でも、せっかく自分で選びつかんだ自分の世界です。親としては、少しでも長く、楽しくこれからの人生を歩んでいってもらいたいと思っております。



2014年8月に初めて50号のキャンパスに描いた作品「太陽の塔」

京の盛夏に団扇の無料配布

連携団体である合同会社京都職人プロジェクトさんの「天才アートKYOTO」をもっと広く知ってもらおうべし」とのご提案により、本年夏シーズンに合わせて団扇の無料配布を実施しました。



当機構から作品画像を提供し、製作費は株式会社 HILTOP（本社・京都府宇治市／精密機械装置製造）さんに拠出いただき、団扇6千枚を京都マルイ、京都府・市観光協会、京都国際マンガミュージアム、京都リサーチパーク、京都市動物園、三条通商店街など、多くのご協力により配布し、外国人観光客などにも好評でした。ご尽力いただきました関係者の皆さまに感謝致しますとともに、来年も継続できればと思います。

和ろうそくに天才アート

7月23日（日）、京都の伝統産業・和ろうそくの老舗「中村ロソク」さんのご協力により、新道アトリエにおいて13名のアーティストが和ろうそくの絵付け制作に挑戦しました。大・小（高さ18cmと12cm）2種類の「ハゼろうそく」に、アクリル絵の具と細筆を使って、各



自のモチーフで絵付けを行いました。今後とも中村ロソクさんとのコラボで絵付け制作を行い、作品展などで展示販売を行います。ご期待ください。

（注）和ろうそくは、米ぬか、大豆、燻（ハゼの木）の実などを原料とします。そのうちハゼの実を原料とする「ハゼろうそく」が最高級品とされます。

市役所に青空美術館開設

中京区にある京都市役所新庁舎整備工事が進んでいます。その工事現場西側の寺町通沿いの仮囲いに、青空美術館9号（京都市内で9回目）を開設しました。仮囲いの壁面に作品パネル（1350×900）を6点展示しています。建設工事現場とはいえ、ややもすると無機質な空間になりますが、青空美術館の開設により「アートの彩り」を与えています。期間は、2018年6月末ごろまでの予定です。



会員・寄付を募集しています

天才アートKYOTOは、当機構の趣旨や活動に賛同していただける会員を募集中です。会員は「正会員・賛助会員・名誉会員」の3種類。また、寄付金や助成金、障害者アートミュージアムKYOTO設立支援基金などのお申し込みも随時受け付けています。

詳しくはホームページに掲載していますので、ご協力をよろしくお願い致します。
<http://tensai-artkyoto>

〔編集後記〕

五穀が実り、物事に熟中するのに適した秋は、食欲の秋、芸術の秋、読書の秋などともいわれます。また、秋は事にあたつての大事な「とき」という意味もあり、「危急存亡の秋（とき）」などとも用いられます。昨今の障害者の創作活動に対する社会の関心の高まりを受け、日本各地で支援活動や作品展、関連イベントなどが開催され、天才アートKYOTOも日を追うごとに作品展やイベントが目白押し状態です。このような状況を追い風ととらえ、今後障害者アートミュージアムKYOTOの設立をはじめ、ますます支援環境を充実させるとともに、さらなる成長を目指す「飛躍のとき」として、気持ちを新たに活動していきたいと考えています。

【表紙の作品について】

川嶋の描画手法は、クレパスを横に寝かせて色画用紙にこすりつけるというものである。これをいつ覚えたのか時期は定かではないが、このスタイルでの制作はすでに7年を経過し、作品は200点ぐらいになっている。クレパスをこすりつける感触を楽しんでいるように見えるが、クレパスの色を微妙に変えながら絶妙なグラデーションに仕上げる。しかも必ず紙の表裏両面に描くという特徴でもある。



『クレパスのグラデーション・コラーージュ』
川嶋 誉大 Yoshihiro KAWASHIMA
色画用紙・クレパス・色紙 390x540mm
2016年

広告主募集中！

『会報 天才アート』は、当機構の活動にご賛同いただける企業様や団体・組織の広告協賛を募集しています。会報の発行部数は毎月3,500部で、会員・協賛団体、関係機関、各地の美術館などに配布・配架をしています。ご協力、ぜひともよろしく申し上げます。
1枠…1万円（4回掲載）
●お問い合わせ・お申し込みは、
info@tensai-artkyotoまで

画材・額縁
画箋堂
京都・河原町五条

京都上鳥羽の印刷会社
MORITA
(有)森田美術印刷
京都市南区上鳥羽火打形町12 ☎075-692-3131

一級建築士事務所
町家・古民家再生 / マンション改修
(株)共立ホームエンジニアリング
06 (6788) 5402 kap@hyper.ocn.ne.jp

妙心寺 塔頭
養徳院
永代供養のお寺 075-461-2898

Kuretake

吉村建設工業(株)
京都市中京区西ノ京小倉町135番地
075-802-1360

発展、ともに前へ...
洛和会ヘルスケアシステム
洛和会丸太町病院 洛和会音羽病院 洛和会音羽記念病院
洛和会音羽リハビリテーション病院 洛和会東寺南病院